大震災を経験した師と共に

救急・救命の志に感銘

平成20年5月、神戸で行われた日本臨床救急医学会に出席した若松　淳氏（胆振東部消防組合消防署安平支署）が正井　潔氏と出会いました。

正井氏は当時神戸市の消防士でありましたが、日本国際救急救助技術支援会（ＪＰＲ）として救急及び救助技術を有する消防人・医療人の有志を集め「一人でも多くの生命を救う」を基本理念にした非政府団体（ＮＧＯ）として、発展途上国に救急救助技術などの援助や支援に取組んでいることを聞き、若松氏は深く感銘を受け、即会員として参加し活動をを始めたそうです。

救急救助技術支援会（ＪＰＲ）は阪神淡路大震災発生から10年目（２００５年）を機にを日本で初めて発足

消防車をカンボジアへ

平成22年3月、胆振東部消防組合消防署安平支署追分出張所の水槽付ポンプ車が廃車となりました。

22年間使用した車両は劣化しているものの、大型投光器や牽引用ウインチなどの装備品は利用可能と感じ、若松氏は神戸市消防局を定年退職後カンボジアで活動中の正井氏に連絡したところ、寄贈の申出があり、消防本部や消防車両メーカーの協力を得ながら廃車となった水槽付ポンプ車を同年6月にカンボジアの地へ届けました。

追分消防を引退し現地で活躍する車両

道路幅が広い北海道特有の大型の貯水槽と多機能を装備した車両は、現地での利用用途が高く、カンボジア国王軍の災害派遣用車両として現在活躍しています。

自らもカンボジアへ

消防車両の寄贈が縁となり、正井氏から「現役救命士、消防士の知識と経験をカンボジアの若い隊員達に直接伝えてほしい」との打診があり、若松氏は11月の派遣隊に志願。消防士2名、看護師1名、車両整備会社役員1名、民間ボランティア1名の計5名でカンボジアに向かいました。

現地では消防、救急、救助の技術指導にあたり、政府関係者を招いた大規模な訓練が行われました。

日本での訓練風景と見間違う様子

今まで日本全国から送られた消防車両など

軍の最高司令官から、「災害派遣システムの構築・防災学校の設立」という確約を得たことで、正井氏は現在も長期滞在支援を行っています。

広報では、昨年から防災や地域の医療確保対策等を取上げてお知らせしていますが、今回はその際協力いただいた消防の方からの情報です。

「カンボジアに追分の消防車を送った」と言う突拍子もない話しの始まりでしたが、日本のように消防機関が無く資器材もままならないカンボジアに「物資と技術」の支援を行いしっかりとした消防救急体制の整備を目指している安平町の一消防士の活動でした。

指導後現地の隊員とツーショットの若松氏

一元化した通報システムや救急隊員はもちろん、救助技術や知識、資器材も無いのがカンボジアの現状。

現在ＪＰＲはBrigade70という部隊に駐留し、部隊内にRRC※711というチームを発足させ、昨年から実働部隊と指導者の育成を図っている。

※ Rapid Rescue Company の略